生物多様性交流フェアでの活動から――

COP10／MOP5に合わせて開催された「生物多様性交流フェア」では、政府や自治体、国際機関、NGO・NPO、教育機関、研究機関、企業など国内外の団体が200を超えるブース展示や100以上のフォーラムなどの関連イベントを実施しました。生物多様性交流フェアの開催場所となった白鳥地区（名古屋市熱田区：COP10／MOP5会場の名古屋国際会議場に隣接）には期間中に約11万8千人の方々が集まり、生物多様性に関する様々な取組を知るとともに、その課題を「自分たちのこと」として考える絶好の機会となりました。ここでは、交流フェアに参加した3団体の取組を紹介します。

【写真提供】
IISD、生物多様性条約第10回締約国会議支援実行委員会

生物多様性交流フェア
【開催期間】2010年10月11日～29日
【会　　場】白鳥地区（白鳥公園／熱田神宮公園／名古屋学院大学体育館）

生物多様性条約市民ネットワーク（CBD市民ネット）

URL ▶ http://www.cbdnet.jp/

CBD-COP10の目標実現に向けた「生物多様性の10年へ」

生物多様性条約市民ネットワーク（CBD市民ネット）は、COP10／MOP5に向けて生物多様性をめぐる内外の状況を前進させることを目的に、NGO・NPO、個人や企業などが参加して2009年1月に発足しました。COP10／MOP5開催年の10年には、「国連生物多様性の10年」決議案提出を働きかけるなど政府や締約国に対して政策提言を行う一方で、1月の「生物多様性年キックオフイベント」に始まり、「100日前記念フォーラム」の開催、直前のNGO向けガイダンスの提供などを通して生物多様性への理解の促進に取り組んできました。

CBD市民ネットが運営したブースでのワークショップの模様

10月11日～10月29日の会議開催期間中は、CBDアライアンス（※）との共催イベントやNGO戦略会議、各作業部会単位でのシンポジウムやサイドイベントを実施。交流フェアの会場では、NGOフォーラムの運営のほか、約120団体が共同出展する大規模なブース展示を行い、会議の成功に向けて多くのNGO・NPOが協力し合いました。

「交流フェアの各ブース内ではパネル展示や日替わりワークショップを行うなど各団体が工夫を凝らし、生物多様性や環境保全を身近に感じてもらう来場者との交流の場となりました。生物多様性は他人事ではありません。CBD-COP10の成果実現に向けて、世界で、そして地域で起きている課題にきちんと目を向け、個人レベル、団体レベルの活動の底上げをしていくことが求められています」（CBD市民ネット東京事務局コーディネーター・道家哲平さん）

2010年7月の100日前記念フォーラムにはNGO・NPOや市民、企業などから約170人が参加

※生物多様性条約への市民団体の参加を促進するための世界的ネットワーク。COP8（2006年、ブラジル・クリチバ）の時に設立された。

ラムサールセンター「KODOMOバイオダイバシティ」

URL ▶ http://homepage1.nifty.com/rcj/

“生きものを守ろう”
子どもたちから発信されるメッセージ

ラムサールセンターは、ラムサール条約と生物多様性条約への理解を深めようと2009年から「KODOMOバイオダイバシティ（生物多様性条約と生きものを守る子どもたちの運動）」を展開しています。この活動には、日本とアジアの子どもたち756人が参加し、湖や湿原、干潟やサンゴ礁などでの生きものの観察や、地元の人たちとのコミュニケーションを通じて「生きものと人との共生」の大切さを学んでいます。

2010年8月開催の「KODOMOバイオダイバシティ国際湿地交流in琵琶湖」には国内16湿地と海外（アジア）5湿地から78人の子どもが参加

交流フェアでの展示では、これまで2年間の活動報告として、全国のラムサール条約登録湿地で計9回、子どもたちが活動してきた成果を発表。ブースに展示されたたくさんのメッセージのほか、「湿地と生きもののお宝ポスター」や活動をPRする動画も子どもたちが作りました。

「活動を続けていく中で驚かされているのが、子どもたちの自主性です。子どもたちは活動への参加をきっかけに、湿地の大切さに興味をもち、生きものを守ろうと自らが情報発信しようとしています。今後も各地でこの活動が盛り上がっていってほしいと思います」（インフォメーション担当・市川智子さん）

子どもたちのメッセージや絵が所狭しと並んだブース

WWF（世界自然保護基金）ジャパン

URL ▶ http://www.wwf.or.jp/

短冊に願いを込めて—
人と自然が調和して生きられる未来

WWF（世界自然保護基金）が1961年に設立されたきっかけは、急激な減少を見せていたアフリカの野生生物を保護する活動を行うことでした。現在では、その活動の範囲を飛躍的に拡大させ、約100か国において様々な生態系の保全に取り組んでいます。COP10／MOP5に向けても、生物多様性の損失速度を減少させる新たな目標設定のための積極的な提言を行ってきました。

短冊でいっぱいになった笹

WWFジャパンのブース出展では、「COP10にあなたの声を届けよう」と題して、WWFが理想とする「人と自然が調和して生きられる未来」への願いを来場者に“短冊”へ書いてもらうイベントを実施しました。なぜ短冊なのかというと、シンボルマークで絶滅危惧種でもあるジャイアントパンダの主食が笹であることにちなんだものです。

中には、1000以上の短冊を持ち寄った地元の中学生たちもいて、ブース内に飾られた笹は七夕のように短冊がいっぱいに。ここに集められたたくさんの願いは、COP10期間中のセレモニーで、議長国である日本政府の近藤昭一環境副大臣と、生物多様性条約事務局のジョグラフ事務局長に手渡されました。WWFの募金活動に参加し、代表して短冊を渡した中学2年生の加藤安寿美さんは、「いつまでも人とほかの生きものが生きていける地球でありますように…」と願いを伝えました。

短冊を手渡すセレモニーでメッセージを読み上げる加藤さん

©WWFジャパン